



青森に息吹を!

学びが拓く、 新たな地域のカタチ

座談会

新たな視点と
持続可能性

還流・移住者
×
地元住民

本県は現在、「人口減少」と「高齢化」という避けられない課題に直面しており、地域コミュニティの活力を維持し、未来へと繋いでいくことは喫緊の課題となっています。

こうした状況下において、一度は県外で経験を積み、新たな視点を持って青森に戻ってきたUターン者、あるいは青森の魅力に惹かれて移住してきた「Jターン者」の皆様が、地域に新風を吹き込む存在として大きな期待を集めています。彼らの柔軟な発想や行動力と、長年にわたり地域の文化や伝統を守り育んできた地元住民の皆様の知恵と経験が融合することで、どのような相乗効果が生まれるのか。その問いの先に、青森が持続可能で豊かな社会を築き上げていくためのヒントが隠されているのではないかと考えています。

この座談会では、実に多様な背景と視点を持つ皆様にお集まりいただきました。それぞれの立場から語られる地域への熱い思い、活動から得られる喜び、そして直面する率直な課題は、私たち社会教育に携わる者だけでなく地域に関心を寄せるすべての人々にとって心を揺さぶり、多くの深い気づきを与えてくれるものと思われまます。

本所報では、この活発な議論の様子を、詳細な記事としてまとめ、地域の活性化に向けた「新たな視点」の必要性と、「持続可能な活動」を支える基盤について、深く掘り下げてまいります。多様な人々が互いを理解し、それぞれの個性を尊重しながら手を取り合い、共に学び、新しい価値を創造していく青森の姿を、読者の皆様にお届けできれば幸いです。

地域に新たな息吹を吹き込む

座談会

青森県総合社会教育センターは、「青森に息吹を！学びが拓く、新たな地域のカタチ」をテーマに、還流・移住（U・I・Jターン）者と地元住民による座談会を開催しました。本座談会では、「つながりづくり」「新たな視点」「持続可能性」という三つのキーワードを軸に、参加者それぞれの経験や知恵を共有し、地域活性化の道を共に探りました。

座談会には、多方面で活躍する5名の皆様にご参加いただきました。青森市の浅虫でまちおこしに取り組む井上丹さん（Uターン者）、十和田市の移住コンシェルジュを務める渡邊ゆうみさん（Iターン者）、深浦町で集落支援員として活動する浪岡敏勇さん（Jターン者）、青森公立大学で経営学を学ぶ学生の中村星斗さん（地元大学生）、そして中泊町で長年ボランティア活動을続ける三上つまさん（地元住民）です。（以下、敬称略）

01 活動のきっかけ

井上

私は青森市の浅虫という温泉観光地で育ち、高校卒業後10年間に地元を離れました。2015年に浅虫小学校・中学校が閉校し、「このまま浅虫がなくなっていくのは嫌だ」という思いから、2016年にUターンしました。同級生た

井上 丹 (いのうえ あかし)

- 青森市浅虫出身
- 浅虫まちおこし応援団がっちゃんこ 代表
- 全国高校生マイプロジェクト青森県パートナー
- 八戸学院大学地域経営学部 特任准教授

経歴

北海道大学大学院修了。2008年、株式会社リクルート入社、10年間教育関係の営業職を務め、高校生のキャリア教育講演も担当。2018年より、八戸学院大学にて大学と地域企業・自治体等と連携して、地域活性化事業を企画・運営。地域経営学部でキャリアデザインの講義やフィールドワークを中心とした研究活動を展開。また、地元では「浅虫まちおこし応援団がっちゃんこ」代表として観光地域づくりを実践中。「がっちゃんこ」とは、方言で「ホッチキス」のこと。



「浅虫マルシェ」の様子

ちと「できることをやる」と「浅虫まちおこし応援団がっちゃんこ」を立ち上げました。「コロナ禍の地域を元気づけるため、地元の人々が楽しめる「浅虫マルシェ」というイベントを始め、毎月継続しています。SNSでイベントや新しいお店の情報などを発信しています。また、地元の人でも地元の

渡邊

ことを知らないという課題を感じています。

私は埼玉県出身で、2023年に青森県に来て、2年目になります。リゾートバイト先で出会った仲間とともに起業を目指した時、仲間の一人が十和田市出身という縁があったことや、都会での起業よりも人口約6万人弱の十和田市で挑戦したいと思い十和田市に決めました。私は十和田市のことをほとんど知らずに来たので、まず十和田市のことを知りたい、私達のことを知ってもらいたいと思い、地域おこし協力隊になりました。活動内容は、移住・定住に関することをミッションとし、インスタグラムでの情報発信や、高校生と十和田市の魅力を発信する「十和田市学生魅力発信プロジェクト（トワプロ）」をメインで行っています。そして2023年11月に起業仲間と共に、居場所づくりとして、やき鳥居酒屋を開業、続いて株式会社リーヴ（リヴィー）を立ち上げ、IT系の仕事もしています。

浪岡

私は秋田県大館市出身ですが、人生の半分以上を青森で過ごしています。うどん店を経営し、コロナで店を廃業したのがターニングポイントとなり、ラジオで聞いた「地域おこし協力隊」の情報を本気で調べて深浦町へ。3年間の協力隊活動を経て、深浦町に制度がなかった集落支援員として採用さ

中村

れ、現在に至ります。この恵まれた環境に感謝しています。今は集落点検のためのアンケートを行っており、これから地域をどうしていくか思索している最中です。うどん店経営時代には、この青森県総合社会教育センターでも2年間「うどん教室」を開催し、多くの方と交流できました。深浦に来てからも「うどん教室をやらせてください！」と提案し、地域のつながりを築く主要なツールとしました。私はSNSよりも対面でのコミュニケーションを重視するアナログ人間ですが、うどんを通じて「あの人、うどんの人だね！」と覚えてもらい、多くの応援者を得ることができました。食べ物の力は本当に強いと感じています。

三上

社会福祉法人内湯療養園でデイサービスのボランティアをしています。利用者さんへのお茶出しや食事の盛り付け・提供、後片付け、



三上 つま

(みかみ つま)

- 旧中里町出身
- めんだいカッチャの会 代表
- 社会福祉法人内湯療養園での地域ボランティアグループ

経歴

結成30年目を迎えたボランティアグループ。会員数は41名、一日3人のチームで週6日、年間300日のデイサービスを献身的に支えている。その他、利用者さんのお迎えからお茶とおやつを提供、お話し相手、昼食の盛り付けなど多岐にわたっている。三上さんの「ボランティアをしてあげているのではなく、ボランティアをさせていたっている」というボランティア精神と、地域における持続的な活動が高く評価され、平成30年9月には、内閣府国務大臣「社会参加章」の受賞に至った。「めんだい」とは、方言で「エプロン」のこと。

清掃などを年間300日、無償で行っています。

自身の「エプロンの会」から数えると結成30年になります。エプロンの会は資金集めのためにアルミ缶収集をしたり、手作りの人形劇で慰問活動もしたりしていましたが活動者が減り解散。その後、今の会が立ち上がりました。

現在の会員は41名で、3人グループでシフトを組んでいます。主婦は事情で休むことも多いですが、互いに助け合い、なんとかシフトを回しています。

会員の平均年齢は74〜75歳と高齢で、車の免許がない人も多いため、デイサービス側から送迎してもらっています。私たちの活動はいろいろな方に支えてもらっています。

また、「おももり県民カレッジ」の地域社会参加活動の認定を受け、年間で100単位を目指して活動しています。現役を終えても地域でボランティア活動を続けることで、自分が世の中の役に立っているという生きがいと責任感を持てれば、健康や長生きにつながり、高齢者が存在感を持って生きられる社会づくりに貢献できると考えています。



「めんだいカッチャの会」会員のみなさん

02

司会

活動から

見えてきたこと

「外との関わりづくり」「気づかれないない地元のよさ」

それぞれ活動を続けてこられた中での新たな気づき、もしくは、実践の中で見えてきた地域課題についてお聞きしたいと思います。

活動しています。現役を終えても地域でボランティア活動を続けることで、自分が世の中の役に立っているという生きがいと責任感を持てれば、健康や長生きにつながり、高齢者が存在感を持って生きられる社会づくりに貢献できると考えています。

60歳を過ぎると働く場が少ない田舎で、デイサービスに出ることが「仕事場」のような楽しさになっている人が多く、皆とても生き生きと活動しています。

三上

65歳から70歳くらいの人たちは、「80歳過ぎれば、辞めればいいんじゃないの」とか言う人もいます。でもそれは、本人が働きたくて、ここに来れば生きがいを感じてやっている中で、辞める年齢は設けてはいけなと思うています。会員の中には80代でも元気で、作業に支障なく働いている人もいて、私はそれでいいと思っています。30年前と比べると、今は確実に働ける年齢層は上がってきていると思いますね。

井上

浅虫で言うと、昭和40年代には旅館が30軒以上、人口も3,000人くらいで、相当賑わっていました。今は旅館も10軒を切る状態で、人口も1,000人ちょっとまで落ち込んでいます。

浅虫の中だけで何かしようとしたらもう限界だと感じています。適度に外からの情報やお店、そして人材を呼び込み、外とのつながり、外との関わりをどう作っていくかが非常に重要だと感じています。

旅館ホテル関係では、地元が外部からの参入を敬遠する傾向がありますが、街づくりや飲食店では外部からの出店が増えています。そういう人たちの、いかに地元側が受け入れ、共に活動していく仲間とするかがポイントです。

浅虫の旅館は、経営者が外部資本に変わった所もあります。内心は抵抗がある人もいます。それは仕方がないことなので、私は中間

渡邊

埼玉から十和田市に来て、住環境の大きな違いに驚きました。電車社会から車社会へと変わり、公共交通の少なさに、正直「みんなどうやって暮らしているんだろう？」と思いました。また、十和田市には個人経営のお店が多く、ビジネスのやり方も都会とは全く違うと感じました。

協力隊の活動を通して、「なぜ若年層が減っていくのか」を考えた中で「十和田市の魅力があまり知られていない」と気づきました。SNSには、東京のグルメやテーマパークの情報が多く、青森の情報が少ないため、自分たちの地域には魅力が少ないと思って都会に行ってしまうんです。

移住者から見ると、奥入瀬渓流や十和田湖はとても魅力的ですが、人と人との距離が近いことも魅力の一つです。そういった皆さんの魅力を高校生と共に掘り起こし、発信するために「十和田市学生魅力発信プロジェクト（トワプロ）」を企画しました。学生が将来都会に行くことは良いと思いますが、最終的には「地元に戻りたい」と思ってもらいたい。



渡邊 ゆうみ (わたなべ ゆうみ)

- 埼玉県出身
- 十和田市地域おこし協力隊(移住コンシェルジュ)
- 36期パワフルAOMORI! 創造塾 塾生

経歴

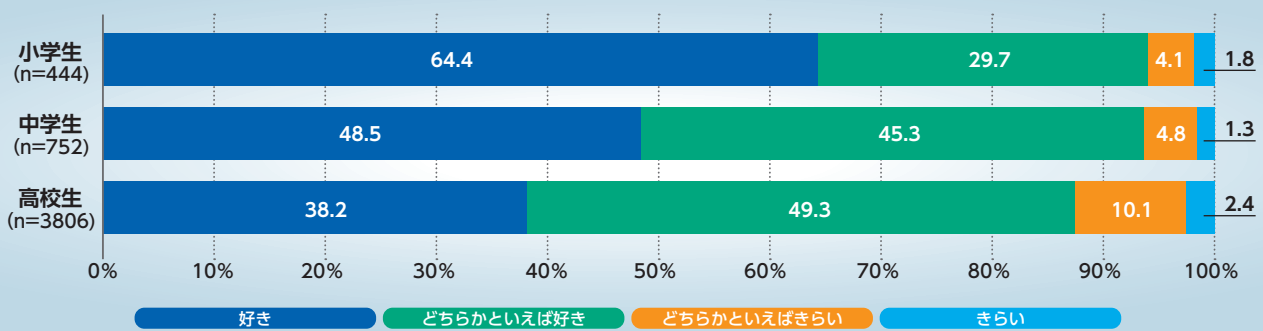
埼玉県出身。埼玉県内の高校を卒業後、エネルギー関連業をはじめ、さまざまな職種を経験。リゾートバイトで知り合った2人の仲間とともに起業を志し、2023年8月、仲間の1人の出身地である十和田市へ移住。十和田市移住コンシェルジュに着任するとともに、現在は「十和田市学生魅力発信プロジェクト」を企画し、Instagram(インスタグラム)での情報発信を行っている。また、「Livvy(リヴィー)」の名でIT系の会社と飲食業の起業を実現。

司会

十和田市でたくさんさんの体験をし、地域と関わることで、十和田市のことをもっと好きになつてくれたらうれしいです。

青森県でも「地域を学ぶ」ということに主眼を置いて、こどもたちが、一度は県外に出ても愛着を持って戻って来られる。戻って来られないにしても何かしらの形で青森に貢献し、協力できるよつに、力を入れてやっています。※青少年の意識調査によると、小・中・高生の約90%が、今住んでいる地域が「好き」と答えています。しかし、年齢が上がるにつれて、特に高校生になると「好き」の割合が減っており、これが若者定着に向けた課題です。

住んでいる地域への評価 住んでいる地域が「好き」は、小学生が64.4%で最も高く、以下、中学生(48.5%)、高校生(38.2%)となっている。



※「青少年の意識に関する調査」(令和7年3月) 青森県こども家庭部県民活躍推進課

浪岡

深浦での活動を通じて、「住んでいる人ほど町の良さが見えていない」という課題を痛感しました。例えば、所ジョージさんのテレビ番組で、東京の渋谷から3,000分の1の確率で深浦町に引き当てた「モヤイ像」のストーリーを、地元の中学生はほとんど知らないんです。

他にも活用されていない建物が放置され、「建てては捨てる」という感覚や、一つ一つの対応に時間がかかってしまうことなどにジレンマを感じています。地域で協力し合えば、「もっと早くできるのでは?」「金額が高いなら他に方法があるのでは?」と思うことが多くあります。

ですから、私は集落支援員として、高齢化が進む岩崎地区で週1回聞き取りを行い、住民の声を吸い上げています。そこから上がってきた問題を、行政任せにせず、小さなことからでもスピード感を持って形にできるよう心がけています。

何でも行政に助成金を求める人もいますが、「どうすればできるか」と相談に来る前向きな人もいます。

聞き取りを通して住民の声を丁寧に吸い上げ、「地域の人々が主体的に考え、納得して活動を回していくこと」が、持続可能な地域づくりには不可欠だと感じています。それが1年かかるか2年かかるかは分かりませんが、少しずつ始めています。

中村

※「モヤイ像」：東京都新島村から渋谷を経て、現在深浦町(旧ウエスパ椿山)に設置されている。「モヤイ」とは、結ばれる、繋がる、協力し合う等の意味がある。



浪岡さんが制作した「モヤイ像ねぶた」

福岡出身なので、青森の雪には本当に驚きましたね。福岡では指一本分積もったら、もう学校が休みになるレベルです。青森では入学式の日でもまだ雪が残っていて、「どうなってるの!ここは日本なのか!」と思うほどでした。寒さには慣れても雪には慣れない。先日福岡に帰省した際、気温10℃でダウンジャケットを着ている周りの中で、私だけがTシャツ一枚で過ごしていたら、「バカなんじゃないの!」と笑われました。体が強くなったのか、気温の感覚が変わってしまったのか。夏についても、今では青森と福岡で気温はあまり変わりませんが、向こうの方が暑く感じるの、緯度や日差しの強さ、紫外線量の違いかもしれません。野球をやっていた頃は目が充血したり唇が腫れたりしましたが、青森に来てからはそれが全くありません。この穏やかな自然環境をうまく使えば、もっと

良い魅力づくりや、利点にできるんじゃないか、そして、外での活動を増やすことができれば、色々なものが繋がる可能性があると思います。

「つながりを増やす」

「幸福度を上げる」

「リーダーの力」

司会

やりがいや喜び、今現在、これをやっていて、嬉しかった、よかったというのを、お聞きしたいと思っています。

井上

「浅虫が好きだ」とか「浅虫を応援している」という声をいただくと、それはもうやりがいになっていきますね。私はもう好きとかは通り越して使命感を持っている感じなんですけども、そうやって頑張っている時には、確かにこの地域を好きだと言ってくれて、応援してくれる人がいる限りはまだまだ頑張れるかなと。

渡邊

トワプロの動画完成発表会で参加した高校生から「私も将来、ゆうみさんみたいな、地域をまとめる人になりたい、サポートできるような人になりたい」と言われた時、とてもうれしく、やってよかったと感じました。やはり地域で何かをするというのは一人の力では難しく、仲間や後に続く人が増えないといけないと思っています。私の活動を見て、目標にして

浪岡

くれている子がいるんだなと思たら、すごく嬉しかったですね。

私はコロナ禍で店を廃業し、どうしようというところで、深浦町に拾ってもらい、すごく恩を感じています。今はこういう職務をいただいて、今ここにいて、自分、やはりそういうのが繋がっていると思っています。これからまだ自分には目標があり、集落支援員という活動も勉強期間かなと思っているところがあって、今しっかりと次の目標を持って生きていられることが、すごくありがたいなと思っています。

中村

本当にゼロになっちゃったところから、今こまど来しました。今日みたいな座談会に呼んでいただける機会も、それがなければ始まらなかったもので、この先もまだ、50代からでも挑戦できることってたくさんあると思うので、それをまた次回、座談会がもしあるのであれば、発表できるくらい、「2年前は、実はこういうことを考えていました！」と言えるようなぐうらいの人になりたいというのが、今の目標です。

僕も、昨年度ワークショッップのチーフという、大学生の代表という形で、高校に行ったんですけど、終わった時の高校生の顔とか、やっぱり皆さんが言われた通り、「忙しいイコール充実」に繋がってきていると思うので、その感覚の楽しさというのが繋がってき

て、やりがいになっていると思うし、僕たち大学生同士の繋がりとというのが、やればやるほど深まっていくことですね。



青森と自分の未来をカタル!
「キャリアサポ」事業での中村さん

中村 星斗

(なかむら しょうと)

- 福岡県出身
- 青森公立大学 経営経済学部3年生
- キャリアサポ事業 企画運営委員長

経歴

大学1年生の頃から、青森県総合社会教育センターの「キャリアサポ事業(大学生と中・高生の交流事業)」に参加し、今年度は、約150名の大学生たちを束ねるリーダーとして活躍中。

自然やスポーツ、人々とのふれあいといったライフスタイルが好きで、もともと「地方」への憧れがあった。そのため、自分の視野を広げたいという理由から、青森県の大学に進学した。

三上

長く活動していると、利用者さんとの会話もすごく楽しいんです。わりと同じ地域の人たちが来ていますので、話すと親戚であつたりとか、すぐ近くのおばさんであつたりとかで、そういう会話もすごく楽しいんです。そしてボランティア同士の間にも楽しいですね。高齢者になると仕事に就けない人が多いので、やっぱりそういう、デイサービスセンター自体が仕事場みたいな感じで楽しんでいるんだらうと思いますね。

03

持続可能な活動に向けて

司会

地域活動を長く続けてこられた三上さんの視点というのは、やはり大事にしなければならぬ視点だと感じております。そこで、「長く活動をしていくためには？」という視点から考えて、10年後、20年後の展望について、それぞれお話しいただければと思います。

井上

地域づくり、地域おこしと言っても、5年、10年当たり前のようにかかるなと思っていますので、2017年から本格的に活動していますけども、まだまだ途中という感じですね。ようやく10年、20年やって、ある程度、形になるんだらうなと考えています。それにはですね、やっぱり活動だけでは限界がありますので、何かしらの収益という形で稼げる仕組みを

浪岡

井上さんと同じになっちゃうんですけど、この地域に長く留まるためには「稼ぐこと」が大事だと思っています。今、起業して行っている仕事がこれから移住して来る方の仕事となるように頑張っていきたいと思っています。

今 集落支援員をやっている、率直に思うのが、もう人口を増やすのは、ほぼ無理だと思っています。誘致しようが何しようかと、私この前、こどもたちに「将来どうするの?」と聞いたたら、「いや、たぶん町を出て行きます」と言っ子がほとんで…。そのような現実を受け止めつつも、これから、今いる人のための活動というか、この地域に住んでいる一人ひとりの幸福度を上げていくしかないと思うんですよ。やっぱりその地区の人でしっかり考えて、ワークシヨップというお話も出ていましたが、そういう中でしっかり組み立てていって、「みんなで作り上



- 秋田県大館市出身
- コロナ禍を機に飲食店(青森市のうどん店)経営から転身
- 令和4年4月～深浦町地域おこし協力隊員として活動
- 令和7年4月、深浦町集落支援員に着任

青森市でうどん店を経営していたが、コロナ禍で事業継続は難しい状況に。自分の将来を考えた時に思い立ったのが「深浦町地域おこし協力隊」への応募だった。そのきっかけとなったのは趣味のバイクで訪れた際の深浦町の風景と人の温かさだった。

その後、深浦町地域おこし協力隊員に任命され、町の空き家の掘り起しや現状調査に関する活動を行いながら、前職の経験も活かし、手打ちうどん教室を開催するなど、町生活活性化イベントの企画・実施に携わる。現在は、その手腕が高く評価され、深浦町集落支援員として、住民との対話や交流を図りながら、地域課題改善のため鋭意活動中。

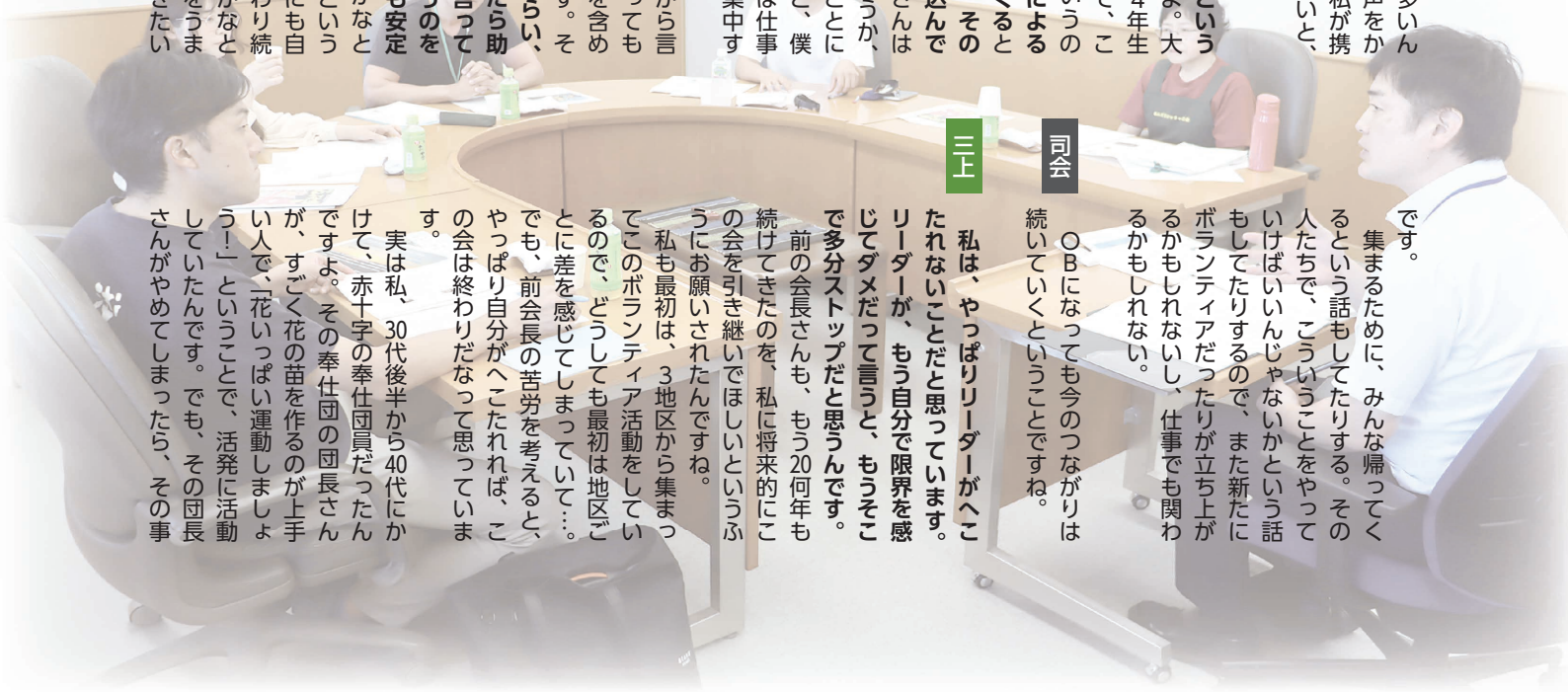


げた地域だよ」という形で、みんなでも納得していくものができればと思いますね。さきほど、三上さんのお話を伺ってすごくグッときました。ただ、深浦町でも、一人

暮らしのお年寄りがすごく多いんですよ。そういう人たちに声をかけるきっかけにもなるし、私が携わる間になんとか形にしたいと、今日はっきりと思いました。

僕は「若者は変わらない」ということはまずできないんですよ。大学生が活動し続ける限り、4年生でも、もう卒業してしまうので、これをどう続けていくかというのとは、やっぱり、縦の繋がりによると後輩育成とかが鍵になってくるというが、重要になってきて、その中で横に広げて友達を呼び込んでもらうことも大切ですよ。皆さんは長く続けることが目標というのか、続けていって成功していくことになつてくると思うんですけど、僕たちはどうしても卒業すれば仕事に就いて、一旦そっち側に集中するんですよ。

ですから、大学生の視点から言うのと、後輩たちが続けていってもらうためには、年末にOBを含めた忘年会というのがあります。そこで先輩たちから助言をもらい、「こういう時は呼んでくれたら助けるよ!」「みたいなことを言ってもらっているの、そういうのを続けていけば、これから先も安定した活動になっていくのかなと」思っています。変わらないというのは成長がないというふうにも自分の中では捉えていて、変わり続けるから成長もしていくのかなと考えているので、その変化をうまく取り入れながらやっていきたい



三上

です。

集まるために、みんな帰ってくるといふ話もしたりする。その人たちで、こういうことをやっていけばいいんじゃないかという話もしたりするので、また新たにボランティアだったりが立ち上がるかもしれないし、仕事でも関わるかもしれない。

Q Bになっても今のつながりは続いていくということですね。

私は、やっぱりリーダーがへこたれないことだと思っています。リーダーが、もう自分で限界を感じてダメだと言うと、もうそこで多分ストップだと思っんです。前の会長さんも、もう20何年も続けてきたのを、私に将来的にこの会を引き継いでほしいというふうにお願ひされたんですね。

私も最初は、3地区から集まってこのボランティア活動をしていくので、どうしても最初は地区ごとに差を感じてしまっていて……。でも、前会長の苦労を考えると、やっぱり自分がへこたれば、この会は終わりだなって思っている。

実は私、30代後半から40代にかけて、赤十字の奉仕団員だったんですよ。その奉仕団の団長さんが、すぐく花の苗を作るのが上手い人で、「花いっぱい運動しましよー」ということで、活発に活動していたんです。でも、その団長さんがやめてしまったら、その事

浪岡

業はパタツと終わってしまいました。あんなに旧中里地区に花いっぱい運動を繰り広げて、それが国の方にも奨励されて、そこまで伸び進めたのに、団長さんがやめていなくなっちゃった。もう、そこでパタツと終わってしまったんです。そういうのを私経験しているのです。

これは私が頑張らないと、この会も続けていけないかなと思ってます。ですから、私の次に続いてくれる新しい人を探して、人を育てながら、そして次に引き継いでいきたいと思っています。

素晴らしい！

司会

めんどりカッチャの会は、無償のボランティア活動で、お金は一切いただいていない中で、年間、300日活動されています。確かに働く場というか、お金の収入があれば、それに越したことはないですけども、それよりも繋がりが、生きがいや、一人で暮らしている人たちが、何か自分の存在を自覚するような、そういうものが原動力になっているということですね。

三上

やっぱり高齢者は、一人で暮らしていると、急に熱を出したり、体調がちよっとおかしかったり、という時には、繋がっている友達にすぐ連絡できるんですね。やっぱり、そういう繋がりが、一番、安心するみたいですね。

司会

地域の活性化を進めていく中でも、特にこれからの高齢社会においては、「お年寄りの生きがいづくり」という視点も持っていかなければならないということを、三上さんのお話を伺って学ばせていただきました。ありがとうございます。

04 社会教育に期待する「活動の場づくり」

司会

青森県総合社会教育センターや公民館のような社会教育行政や施設に対して、「こういうサポートや支援があればいい、こういうのがすごく助かった」というものがあれば、教えてください。

井上

皆さんが先ほどおっしゃっていただいたとおり、地域に住んでいる人は、自分の地域のことを知らない人が意外に多いですから、それを知れるような機会というものを作りたいですね。でも社会教育センターだけに頼るのではなく、地域活動をしている人たちがいるっていうことを世の中の人にもっと知ってもらいたいです。「地域のことを何とかしよう！」と活動している人が各地域に必ずいますので。そうすれば私たちの活動も裾野が広がっていくと思います。

渡邊

私は、昨年度の青森県総合社会教育センターの事業でもある「パワフルAOMORI! 創造塾」の卒業生で、地域との繋がりがぐくみや起業案を考える塾だったんです。そこで得た起業に対する考え方だとか、塾生たちとの横の繋がりとかが、得るものが多く、それは今の活動につながっています。起業に興味がある方や、地域を良くしていきたいと思っっている方には、参加してもらいたい内容だったので、続けてもらえたら嬉しいなと思います。



「パワフルAOMORI! 創造塾」での渡邊さん

浪岡

私は現在、集落支援員として、地区の中で困り事とか、「こういうことしたいんだよ！」っていう思いがある人、いつでも来て私に話してくださいと言っています。役場と繋げるし、やれる仲間がいるのであれば連れてきてもらうし、どうしたらできるのかをお手伝いしています。ですから、社会教育センターさんのような施設には、私たち集落支援員の相談役というか、一緒にどういう助け方が

中村

できるのかっていうのを教えてほしいです。「こういうことがあったら、私たちはこういうお手伝いができますよ」っていうのがあれば心強いですね。私のように、社会教育センターさんが「何をどう活動しているのか？」っていう、組織自体のことが分からないっていう方が、少なからずおられると思うので。なので、「私たちはこういう活動をしているので、ぜひこういうふうを活用してください」とか。お金じゃなくて、人と繋がるために、「こういう企画があるのぜひ参加してください」とか。そういうのを分かりやすく、小学生とか中学生でも分かるくらいのレベルで教えていただけるといい機会や告知があればいいのかな。私の率直な意見です。

僕は「キャリアサポ事業」でしか関わっていないんですけども、今やっているこの事業は続いてほしいと思っています。大学生が中学校や高校に行ってお話をする機会ほとんどないと思っでいて、大学生と中学生が関わって話せる機会があるというのは本当にいいことだと思っています。先生に相談できないことを、その場で会った大学生に相談するということも意外とあったりして…。そういう相談というのは、正解が必要じゃなくて、聞いてあげてヒントになれば、もう成功なので、これからもぜひ続けていてもらえたらなと思っています。

うちの会員はですね、全員が青森県知事が学長の「あomor県民カレッジ」の学生で、地域参加活動としてデイサービスセンターで活動しています。ボランティアに來れば必ずその学習記録に記録をして、そして100単位貯まると、年に1回、この社会教育センターに來て、生涯学習フェアに参加するんです。みんなそうやって、自分たちの活動が認められることが嬉しいみたいですね。本当に楽しみにしているんですよ。あとは私たちの地域の公民館活動についてなんですけど、うちのこの公民館が老朽化しましてですね、今、公民館が閉鎖しているんです。その代わりに、役場のすぐそばにある複合施設のパルナスという所で、色々な活動のサークルをやっているみたいですね。地域ごとに、町のお祭りとか、秋祭りには、そういうサークルでやっているのを披露したりとかって。本当に最近では地域ごとの祭りが行われなくなったりとか、昔から各地区にあった伝承が、途絶えてしまっていることが、すごく残念ですね。地域での交流が薄れてしまっているというか、コロナ禍前は、お通夜とかやっても、集会所の中に人があふれるくらい、弔問客が訪れて、終わった後は振る舞いがあって、そこで簡単にお酒とか、お赤飯を炊いたのを出したりとかって、地域ですごく交流があったものなんですね。でもやっぱりコロナになって、それ以降はそう



というのが全然なくなりましたね。本当の親族だけでひっそりやるのか。だから、本当に地域の人が集まる機会が少なくなったように感じています。それだけ、やっぱり人との触れ合いも希薄になったのかなと思って残念です。ですから、人が集まって、もっと気軽に交流できる場所があればいいと思いますね。

青森県総合社会教育センター

事業紹介

地域づくりに関わる
人材育成等の事業

パワフル AOMORI!! 創造塾

18歳以上の地域を元気をしたい人を対象に、講義・演習、ネットワーク作り等を行う事業です。

青森で生きる未来人材育成事業 (高校生地域活動促進事業)

ボランティア登録した高校生を、県内各地で行われる地域活動に派遣する事業です。

青森と自分の未来を“カタル”！ 「キャリアサポ」事業

大学生が高校生等と語り合うワークショップを行い、双方のキャリア形成を図る事業です。

※詳しい事業内容等は、当センターホームページをご覧ください。

地 地域の最前線で活躍されている皆様の生の声は、私たち社会教育行政に携わる者や地域に関心を寄せる人々に貴重な示唆を与えてくれました。

特に印象的だったのは、還流・移住者の外からの視点によって、地元住民が気づいていない地域の力が再発見され、新たな可能性が広がっている一方で、長年、地元住民が築き上げてきた地域に根差した活動を高齢者の「生きがい」を軸に周りから支えられ、持続している地域もあるということです。

このことから、地域課題を解決する糸口として、「新たな視点」と「持続可能な視点」が交わるための対話や場づくりが大切だと思いました。そして、様々な考えを持つ人々が、一つの目的に向かって互いに理解し合い、各世代が生きがいや、やりがいを感じながら協力し合うことが、地域活動の大きな原動力になることにも気づかれました。

座談会の中で語られた「地域を知る機会の創出」「活動の継続性」「後継者の育成」「リーダーシップの重

編集後記

住民一人ひとりが各世代の「生きがい」を理解し合う

「新たな地域のカタチ」

要性」、そして「人々の生きがいづくり」といった視点は、青森県が直面する人口減少や高齢化をはじめとする喫緊の課題に対し、社会教育が今、何をすべきかを改めて教えてくれました。

人口減少が進むこれからの社会において、住民一人ひとりが、地域に愛着と誇りを持ち、自らの力で、できることを、協力しながら取り組むことが、これまで以上に求められていると考えます。

これからの新たな地域づくりに必要なことは、若者から中高年、そしてお年寄りそれぞれの「生きがい」を、各世代が互いに理解し合うことではないでしょうか。

住みやすい地域をつくるっていくためには、住民がつながり、自らが主体的に考えて動くことで、学びとつながりを生み出す社会教育の場は、ますます重要となります。

青森県総合社会教育センターは、今後一層、多様な人々の学びと交流の支援に取り組んでまいります。本所報が、皆様にとってこれからの地域と社会教育の役割について考える一助となり、新たな行動のきっかけとなれば幸いです。

青森県総合社会教育センター

編集
発行

〒030-0111
青森市大字荒川字藤戸119-7
TEL.017(739)1252 FAX.017(739)1279

詳しくは

[ホームページ]



[Facebook]



[Instagram]



「HIBIKI」に関わるご意見は下記のアドレスへ
E-SHAKYO@pref.aomori.lg.jp
件名に「HIBIKI 130号」とご記入ください。